

# 「核」の連鎖・「難死」の連鎖

——小田実『HIROSHIMA』を読む

道場親信

はじめに

本報告では、小田実の小説『HIROSHIMA』について、小田の思想の柱をなす「難死」の思想と「被害者⇨加害者」連鎖という二つの系からなる議論を軸として読解を試みたい。この二つの議論は相互に緊張関係にあり、そのことに注目しながら『HIROSHIMA』が実現しようとした思想的課題あるいは文学的実験の所在を確かめようというのがねらいである。

『HIROSHIMA』には小田の思想が明確に形象化されているとまず第一に言うことができるが、それはふりかえれば『HIROSHIMA』以後に小田自身が「難死」と「被害者⇨加害者」という二つの概念からなる思想を深め自己注釈を施していった結果ということもでき、小田の思想世界を追う上でもこの作品が重

要な契機をなしていることがわかる。この点につき、小田の思想の枠組みを確認しながら、小田自身にとつてのこの作品の意味も考察することで、この作品が目指したものについて明らかにできればと思う。

## 一 小田実と小説『HIROSHIMA』

### 1. 「小田実が小田実を語り解説する」

小田実と「ベ平連（ベトナムに平和を！ 市民連合）」で活動をともした評論家・活動家の武藤一羊は、一九七一年に書かれた小田実論の中で「小田実の書いたものに解説はいらぬ。小田実が小田実を語り解説する——そういう具合に彼の評論は成立しているからだ」と述べている（武藤 一九七一―七五、八九頁）<sup>①</sup>。本作『HIROSHIMA』は、中でも最もよく著者本人によって「解

説」された作品の一つであろう。管見の限りでも、小田（一九八三、一〇・一三頁・一九九五c、三一〇頁・一九九六a、一九六一七頁・一九九六b、三三三―三四頁、五九四頁、六〇五―一四頁・一九九七b、三二八頁）、西田・鎌田・下平・徐・平野・江口・高・小田・キム・バルドルジ・本島・秋月・伊藤（一九九〇、五〇頁）などがある。中でも、『でもくらていあ』（小田 一九九六b）では八頁にわたって「解説」がなされるとともに、ここでは「絶対的加害者／被害者」という新しい概念が付加されることで『HIROSHIMA』の読解に新たな、そして強力な補助線が引かれている<sup>60</sup>。

一見したところ、すでに確定した作品に対する著者本人による「解説」であるため、その「解説」に述べられたことがらが「作品」そのものに当初から内在していたかのように受け取ってしまうがちであるが、逆に「解説」の積み重ねによる「作品」の補完あるいは著者自身の思想の深化といった面を考えていくことができるのではないか、というのが本作品に関する著者本人の言説を迫った上で浮かび上がってきた了解である。つまり、『HIROSHIMA』を書き上げて以後に深化していった著者の思想が、事後的にこの作品世界の中に読み込まれていくというプロセスを見ることのできるのである。著者自身は必ずしも自己の作品を「解説」する論調に変化が生じていることに自覚的であるようには見えないが、『HIROSHIMA』という作品は、著者自身にこの作品との対面を何度も強い、そのたびごとに新たな要素が補強されていく、つまり著者に思想的な前進を強いる作品であったということができるともいえるかもしれない。

それゆえ、『HIROSHIMA』の読解を進めていくにあたっては、

小田自身の自己解説を参照し、さらに批判的に対峙しながらこれに取り組むという態度が必要となるだろう。

## 2. 小説『HIROSHIMA』

さて、作品の読解に入っていく前に、この作品の構成についてごくあらましの見えておくことにしたい（以下、参照テキストについては講談社文芸文庫版「小田 一九九七a」を用いる）。

先にも述べたように、この作品は小田の思想が明確に形象化された小説であるように見える<sup>61</sup>。この点に関しては、時系列的に見て二つの方向からこのことを考える必要がある。一つは、この作品以前から展開されてきた小田の思想との関連であり、もう一つは、これまであまり意識されてこなかったが、作品以後にこの作品に関連して小田が語り出してきた思想との関連である。

のちに詳しく見るように、この作品に関連する小田の思想としては、「難死」の思想<sup>62</sup>および「被害者」加害者「連環」という形で括られる二つの議論系が最も重要である。この二つの議論系は『HIROSHIMA』の中でもさまざまな形でその形象化の痕を見ることができるとは、重要なのは、『HIROSHIMA』以後、小田がこの二つの議論系を深めていく上で、この作品の自己解釈をくり返し試みているということである。その意味でも、『HIROSHIMA』は小田の思想によつて生み出された作品であるとともに、小田の思想を先取りした作品でもある、ということが重要だろう。ときに小田が「解説」しすぎていることにより、この作品が小田の思想の単純な反映物に見えてしまうということもあるかもしれないが、それは順序が逆なのであって、そのように見えるという

こと自体が、小田自身がこの作品を書くことによって喚起された問いに答え、思想的なことを充填していったから、だというべきだろう。

この作品の表題である「HIROSHIMA」という固有名詞は、すべて大文字で表記されている。これは地名としての「広島」を超えて、核被害、あるいは核に覆われた世界を象徴的に集約する名前であるということが出来る。本作に先立つ一九七八年に書かれた『民』の論理、「軍」の論理』の中で小田は「ヒロシマ」、「ナガサキ」（と片カナ書きにするのは、二つともただの地名ではなくて、時間と空間の双方においてひろがりをもち、歴史にも世界にもいやおうなしにひろがって行く名前だからです」と述べている（小田 一九七八、三八―九頁）。本作ではさらに大文字表記によるローマ字が採用されているが、これは先の発想の延長にあるものと考えてよいだろう。日本語文学の世界でローマ字による表記を採用したことについて、英語圏では必ずしも正確に理解されていないかもしれない。というのも、トリート（二〇一〇）は「Hiroshima」と、通常のローマ字による地名表記を採用しているからである。この表記では、英語圏においては一都市の名を示す通常の固有名詞と差異のないものになってしまうだろう。

本作品はⅠ・Ⅱ・Ⅲと三つの部から構成されており、それぞれ話法も語り手の視点も時間の流れも異なっていることは、一読して瞭然のことである。

まず（Ⅰ）は、アメリカ（おそらくはニュー・メキシコ州）の「白色砂地（ホワイト・サンド）」と呼ばれる地域を舞台に、徴兵に取られていく青年たち、民族の伝説を語る先住民（ホピ族）らの登

場人物が戦争に巻き込まれていくストーリーを柱として、その登場人物と何らかの接点を持って広がっていく、互いに知らない登場人物たち——「婦米」日系少年、朝鮮人少女、大阪から疎開した中学生、南方留學生ら——のライフヒストリーが織り合わされ、「その時」を迎えるまでが描かれている。『HIROSHIMA』全体の四分の三を占めるこの（Ⅰ）では、民族もジェンダーも、そして「加害／被害」の関係においても異なるポジションの登場人物たちを、作者が俯瞰的に配置しているという印象が強い。「日本人」だけを「唯一の被爆国民」として描く戦後日本の支配的な語りをこのような配置によって相対化するとともに、やがて原爆により「難死」を遂げていくこれら人物たちの、それぞれに固有な死を読み手に感得させるための設定であるということはいくらかわかる。そのために、諸属性の「勢揃い」ともいえるべきこの長い（Ⅰ）は、「悲劇」の「運命」を役割的に与えられた属性的な登場人物たちによる叙事詩的物語、という様相を帯びている。あくまで個別的な死を死ぬ形で個々人のライフストーリーが詳しく語られてもいるのだが、同時に典型性による配置の操作が働いていて、死者の個性は「多様な被爆者」のバラエティを示すアイテムとも見える。だが『HIROSHIMA』が、「類としての被爆者」を描いたとするトリートの評価（一九九七、四四五頁）は、後に見るように小田の「難死」の思想に対する理解の不十分さを示している。

これに対し（Ⅱ）では、「ホワイト・サンド」の牧場労働者だった青年、ジョウ・克蘭シーが乗っていた爆撃機を撃墜され、広島島の捕虜収容所に入れられていたところで被爆、焼け跡で日本人被爆者に取り囲まれてもつれ合ううちに死んでいく短いシーン

を、青年の意識を中心に少し離れたところから語る話法で描いている。文芸文庫版で一二頁ほどの短い場面である。

(Ⅲ)は、ベトナム戦争後のアメリカの病院に入院する、いずれも核被ばくした先住民の老人(ホビ族と対立する民族の一員、元ウラン鉱山鉱夫)と少年(ホビ族、ウラン鉱山の廃液が垂れ流された川の水を生活用水とした地域の子どもで目が見えない)、ベトナム帰還兵でアトミック・ソルジャーの白人兵士、コンゴ出身の黒人医師の対話からなり、(Ⅰ)に登場した人物たちがこれらの登場人物に憑依したり、互いに属性や人格を重ね合せていく——「堆積」(三五六頁)——ことで、キャラクターが重層化していく幻想的なストーリーが展開する。主な話者は先住民の老人である。やがて最後には、これらの登場人物たちがヘリコプターに乗り、アメリカを訪問した昭和天皇とこれを迎える大統領に「グラウンド・ゼロ」の土を浴びせかけようとしてヘリコプターが天皇・大統領の上に墜落する、というラストシーンに至る——より正確には、それも幻想であり、入院していた老人と少年と元兵士が「みんな死んだ」と告げられて終わる、という結末である。この部分は全体の約四分の一を占める。

(Ⅰ)と(Ⅲ)をつなぐのは、借景的に用いられた天地創造と人類の破滅と再生に関わる先住民の神話であり、核文明の始まりと、その即座の帰結、はじまりと終わりの同時出来がこの神話によつて示唆されている。こうした物語の構造が、あとで詳しく見るような小田の思想の表現(およびその内的な緊張)をうまく形象化する仕掛けとなつている。

### 3. 時代状況と「HIROSHIMA」

文学作品を単純に時代状況に還元してしまふことは慎まなければならないが、『HIROSHIMA』のクライマックスを見る限り、やはり書かれた時代状況による補助線を引いておくことは有効であると考えられる。まずはこの作品に関連した事項を年表的に掲げておこう。

一九四五年	広島・長崎原爆投下、大阪大空襲、敗戦
一九六五年	米、北爆開始(ベトナム戦争)、ベ平連運動はじまる
一九七四年	米、ベトナムから撤退、ベ平連解散
一九七五年	サイゴン陥落、原水禁国民会議「核と人類は共存できない」声明、昭和天皇訪米
一九七七年	原水爆禁止運動「統一」世界大会開催に合意(八五年)
	小田、テニアン・米本土の旅
一九七九年	NATO「二重決定」、ヨーロッパ反核運動の高揚(八〇年代前半)
一九八一年	『HIROSHIMA』出版
一九八二年	第二回国連軍縮特別総会(SSDII)

小田は「私は二年前(八一年)、七年かかって書いた小説「HIROSHIMA」を完成して世に出した」と述べているが(小田 一九八三、一〇頁)、八一年から七年遡れば七四年、それはベ平連解散の年であった。つまり、小田のこの作品はベトナム戦争が終結し

た時期から構想されていたものであり、七五年の昭和天皇訪米という出来事が作品に歴史的な刻印を残している。小田自身が作品の末尾に記すところによれば、執筆には七九年から八一年までであったという（小田 一九九七a、四一九頁）。一九七七年に小田はテニアン島などの太平洋の島々を訪問するとともに、ニューメキシコをはじめとして米本土を旅行している。これらの現地訪問が『HIROSHIMA』における「ホワイト・サンド」（ヘイ）やテニアン島などの描写（二六五―六頁）に活かされることになる（また、『HIROSHIMA』と並行して執筆された戦争体験をめぐる短編群「海冥」収録の諸作品（小田 二〇〇〇）にもこの旅行の成果は活用されている）。

ベ平連解散の翌年、七五年秋に昭和天皇がアメリカ合州国を訪問した（九月三〇日―一〇月一四日）。帰国後の記者会見（一〇月三一日）で自らの戦争責任に対し「そういう言葉のイヤについては、私はそういう文学方面はあまり研究もしていないのでよくわかりません」と答え、さらに「原爆投下が投下されたことに対しては、遺憾には思っています、こういう戦争中であることです、から、広島市民に対しては気の毒であるが、やむを得ないことであると私は思っています」と語っている。この天皇の訪米とその後の記者会見での発言は、(Ⅲ)のモチーフに具体的な形を与えている。つまり、本作品はこの昭和天皇の「言葉のイヤ」にこだわり、「文学方面」から責任の所在を明らかにするという性格をもっているのだ。それゆえにまた「核」をめぐる昭和天皇と合州国大統領の「共犯関係」（トリート）が一九四五年八月の原爆投下のプロセスの中に、そして戦後日米関係の中に埋め込まれていることに対する

文学的告発であるといえるだろう。

加害性への――より正確には加害性と被害性の連環への――こだわりは小田の終生のテーマであったが、この時期『HIROSHIMA』があくまで「加害者性」を指し示そうとする姿勢は、同時代の核言説に対する異議申し立てでもあった。一九八二年に予定されていた第二回国連軍縮特別総会に向けて高揚していた日本の反核運動に対して小田は次のように批判し、「加害者」認識を欠落させたこの時代の運動がベトナム反戦期のそれよりも「後退した」ものであることに苦言を呈していた。

「私が今ようやく西ヨーロッパにかなりおかれて日本にも起こって来た最近の「反核」「軍縮」を求める人びとの動きを大きく評価しながら、そこに同時に危惧を持つのは、ひとつには、それが、まず、被害者としての自分の立場とともに加害者としてのありようを見すえようとする「ヒロシマというとき」の位置から、もっぱら「被害者の立場」にだけ基づこうとするところにまで全体として後退してしまつたように見えるからだ。」（小田 一九八三、四七―八頁）

この時代、たとえばヨーロッパの反核運動においては、「ユーロシマ」という表現が用いられ、かの地がヒロシマのように核の戦場になる、という危機意識が語られていた。東西に分かれたヨーロッパの民衆は、核戦争の「被害者」であるとともに、互いを傷つけあう「加害者」であった。日本の運動は、日本政府が「アメリカの核の傘に依存する」安全保障政策を公言し続ける中でこれに対する批判を置き去りに、ただ抽象的な核兵器廃絶のみを訴え続けていた。それは自分たちを核戦争の「被害者」の立場からの

み表象するということでもある。ペトナム反戦運動以来、「アンボ」を問題にし続けてきた小田にとつて、これは広島・長崎の被爆体験も、いま現在の緊張状態も忘却した、「後退」した運動であると映つたのは当然のことであろう（ここでいう「ヒロシマ」というとき「の位置」とは、いうまでもなく栗原貞子の詩をふまえた言表である）。

## 二 これまでの『HIROSHIMA』読解

### 1. 「加害」と「被害」をめぐる

すでに述べてきた通り、本作品を理解する上では、小田の思想の中でも最も重要な議論である「難死」の思想と「被害者」加害者」連環という二つの議論の系からなる思想認識が重要であり、小田本人もその観点から本作品を意味づけている。拙稿（道場二〇二三）でも論じたように、小田にあつてはこの二つの議論系が相互にせめぎあいながら緊張感のある思想を生み出している。その中身については三一で概観する予定であるが、この枠組みを理解しておくことは本作を読解する上での必須の作業である。

小田にとつて原爆をめぐる人びとの体験は、殺し殺される関係——「被害者」加害者」連環——の堆積する「戦争」そのものを表象する場であつた。「戦争」の全体像を表象するという課題に對し、小田は評論とは異なるスタイルで取り組んだ。小田は文学（小説）というものの本質は評論とは異なり「喜劇」性にあると述べている（小田 一九九一—二〇〇二、四三六頁）。つまりある種のドタバタ。厳肅な悲劇ではなく、厳肅なドタバタを描くことで、

人びとの日々の認識や想像の中から消去されてしまつていようしようもない矛盾、歪み、不正を明るみに出す。だがそのような仕掛けの中でも、本作は小田の評論・思想とあまりにも直接的な関係を有しているばかりでなく、その後小田自身が「解説」を重ねることで補充され、小田思想の「体系」の中に深く埋め込まれた作品となつた——まるで作者が制御できていないことなどないかのように。とすれば、ことの成否はともかく、小田の思想に即してこの作品を見ることが有益だろう。

だが、従来の研究では、『HIROSHIMA』について「被害者」加害者」連環の視点から読み解く作業は、たとえば黒古一夫が「ヒロシマ・ナガサキ」を（加害）と（被害）の相関から捉える視点の明晰さという点では、小田実の『HIROSHIMA』に較べようもない」と述べているように（二〇〇二、三一頁）、従来から行なわれてはきたのだが、「難死」の視点は必ずしも明確とはなつていなかった。また、「難死」と「被害者」加害者」連環という二つの議論・視点の関連について掘り下げた議論もなされてこなかった。この小説においては、加害／被害の連鎖が、核物質の連鎖と交差して描かれている。たとえば黒古は次のように述べる。

「なぜ小田実は、「ヒロシマ・ナガサキ」と直接関係ないこの第三章の「夢物語」を構想したのか。答えは簡単である。ウラン採掘に始まりプルトニウムの再利用でその循環系が閉じる核エネルギー・サイクルの反人間性を明示したかったのである。」（黒古 一九九七、四六五頁）

「答えは簡単」なのか？ このような素朴還元論が「答え」であるならば、(Ⅲ)の複雑な構成は必要がなくなるだろう。ここ

に語り出されているのは黒古の世界観であり、彼の世界観を『HIROSHIMA』に投影しているだけである。小田がこの作品で取り組みたかったことは、もっと別なところにある。また揚げ足を取るようで悪いのだが、黒古のいうようには「核のサイクル」は「閉じ」ない。核エネルギー利用の仕組みは、基本的に連鎖ではあるが、「サイクル」ではない。「サイクル」、つまり自己充足的な「閉じた」体系という言葉は、基本的に核開発者の語る／騙る神話に過ぎないというべきだろう。

「被害者」と「加害者」は「連鎖」している。しかしそれを行うだけでは不十分だ。『HIROSHIMA』は、「被害者⇨加害者」連鎖を指し示すばかりでなく、その連鎖をいかに断ち切るか、というテーマに挑んだ作品である。そしてその一つの可能性として、「絶対的加害者」の存在を指さし、これとどう相渉るかという問題に文学的に取り組んでいる。

## 2. 「全体性」をめぐる

『HIROSHIMA』という作品をめぐる、小田は次のような「解説」を残している。

「ベトナム戦争反対運動のなかで、私は「被害者⇨加害者」の連鎖を懸念に考え始めた。人びとの「難死」はただ平面的につらなりあっているのではなくて、「被害者⇨加害者」の連鎖を形成しながら、より強い者はより弱い者を殺し、より弱い者はより強い者に殺される上下関係のなかで、人びとは殺し、殺され、それぞれに「難死」する。私には、この「難死」の全体の姿が許しがた、堪えがたいものに思えた。その思いと怒りがあって、私はつ

いに『HIROSHIMA』とものに題することになった小説を書き始め、七年かかって書き上げて一九七〇年に本として世に出した（講談社）」（小田 一九九六a、一九六―七頁）

ここでいう「難死」の全体の姿を描いたのが『HIROSHIMA』ということになる。これまでの小田研究においては、小田の文学的方法に「全体性」の追求があるということはしばしば語られてきた（たとえば黒古 二〇〇二・トリート 二〇一〇）。本稿では小田の「全体小説」概念について十全に論じる余裕はないが、太平洋をまたぐ大きな配置と出来事のとりかえしのつかない因果的な重層、そして個々の登場人物には思いもよらない形で互いが結び合わさっていく運命——そうしたテーマが描き出された（Ⅰ）はまさに「全体性」を体現しているといえる。しかし、核攻撃下の広島を描いた短くも印象的な（Ⅱ）、そして（Ⅲ）といった手法も異なるこの小説全体と向き合うとき、「難死」の全体の姿は単純な俯瞰によってはとらえられないと著者が考えていたことがわかるだろう。「難死」の全体の姿をとらえることの困難と、その困難に抗して文学表現を形づくるという格闘が「全体」ということばに込められていたと解するべきではないかと思う。

この「全体性」について、トリートは「アメリカの核ヘゲモニー」によってつくり出された世界の全体性であるのとらえ、次のように述べている。

『Hiroshima』の短い第二部で、ジョウ・克蘭シーの意識の個人的な「おれ」が共同的な、全体化された「おれたち」になった時、被害者と加害者の間の倫理的な区別（サルトルの用語では「状況」）は乗り越えられ、明らかにグロテスクな全体性が私たちに

提示される。この解釈では、「[...]『Hiroshima』はまさしく「全体文学」の事例となる。小田にとつて、このような全体性は、戦後のアメリカの核ヘゲモニーの行使を通じて生じた「全体性」——小田のべ平連が闘ったのと同じ全体性——に由来しているに違いない。それは広島を破壊した側とヒロシマそれ自体からなる全体性である。それは、私たちが「核の時代」という簡潔な言い方で言及する全体性である。」(トリート 二〇一〇、五三六―七頁)

そして、こうした「全体性」を取り上げているがゆえに、この作品は「核」文学(黒古)、「核」批評(トリート)の出发点をなすと評価される(黒古 一九九三、トリート 二〇一〇)。しかし、切り取られた状況の中に「被害者」と「加害者」を発見し、政治・経済・軍事的な構造の存在を指し示すだけであれば「文学」は不要であり、むしろ「社会学」の方が有効であろう。むしろ、その構造をどのようなイメージでとらえ、にわかには解体しがたいと思われるその構造の破れ目をどのようにこじ開けるかという問いに向かうとき、初めて「文学」の場が開かれてくるのではないか。したがってここでは、「全体性」への取り組みという以上に、「全体性」をイメージする視点がどのように仕掛けられているかの分析が必要である。「全体」がはらむとりかえしのつかない「難死」の広がりと加害/被害の連鎖、それは「錯綜」(黒古、一九九七)しているのではなく、それぞれの「難死」者の中からすべてが見えないことのあらわれである。「難死」という視点に立つことで、個々の互いに見えない(が関わっている)「難死者」の個別的な死をたどるという道すじが示される。

小田は一九九五年に出版した『「殺すな」と「共生」』(小田

一九九五)の中で、「殺した側に立つた自分の過去を無視して、殺された体験の認識だけにとどまっているかぎり、戦争の全体の姿かたちが見えて来ない」(二〇頁)と述べる一方で、「ここで大事なことのひとつあります。爆弾を投下する側、もつと端的に言つて、殺す側にはよくものが見えていないことです。殺される側にこそ、いろんなものが見えて来る。[...]そのいろんなものなかに、「難死」の全体の姿かたちももつと大事なこととして入っています」(三二頁)という二つのことを指摘している。戦争の全体像は「難死」の全体像といいかえられ、加害性の認識を抜きにした「被害者」の視点も、被害者を抜きにした「加害者」の視点もいずれも不十分であり、殺されてしまった無言の人びと、つまり他者となった「難死」者の視点に立つことなくしては戦争の全体像は見えてこないというのである。しかし、「難死」者一人ひとりの視点からは戦争の全体像は見えてこないだろう。これらを結びあわせていく視点は、たとえば爆弾を落とす高空の視点でもありえない。殺された側から殺した側を問い、その関係をさかのぼっていくことで互いの関係を知る——そのような方法がここで考えられているのだとすれば、広く面的に拡がったさまざまな当事者を描く(Ⅰ)と、多様な「亡者」が「堆積」しながら加害責任を問う(Ⅲ)とでは、水平性と垂直性といった視点の移動軸の転換がある。

### 3. 人種表象をめぐる

既存研究における視点設定の問題点についていくつか述べてきたが、もう一点だけ指摘しておきたいことがある。それは、黒古



(二〇〇二)が本作品のキーワードの一つである「グーク (gook)」ということばを一貫して「ダーク」と誤記していることである。

「グーク」とは、もとはアメリカのフィリピン領有に伴う掃討戦の中で生まれたフィリピン人に対する蔑称であり、さらに朝鮮戦争時には朝鮮人——「敵」である朝鮮人民軍だけでなく、「味方」であるはずの韓国軍／人も「グーク」と呼ばれた——、ベトナム戦争時にはベトナム人——朝鮮と同様南北とも——を指す蔑称として用いられたことばである(ラミス 一九八二)。一般にアジア系の人びとを差別することばとして広がりをもつ表現だ。ダワー(二〇〇一)も指摘するように、こうした人種表象のステレオタイプが融通無碍に拡散するのと同様、表象を名指すシニフィアンもまた融通無碍に拡散する。『HIROSHIMA』では、「ジャック」「インディアン」「グーク」と無碍に拡散する呼称があえて相互に重なり合い融合する過剰なシニフィアンとして効果的に活用されている。たとえば、(Ⅲ)でベトナム帰還兵であり、アトミック・ソルジャーでもあるグレン・テイラーは、先住民の老人と少年が入院する病室を見て、次のようにいう。「なんだ、この部屋はグークばかりじゃないか」と(三七二頁)。

「グーク」の名において重ね合わされる多様なエスニシティの人々、「被害者」も「加害者」も強引に「グーク」へと重ね合わされるこのスラングに込められた暴力の中に、(Ⅲ)における主体の重ね合わせの仕掛けが隠されている。この「グーク」ということばは、(Ⅲ)を読み解く上で必須の鍵となるはずだが、いくらか字面が似ているからといって、一貫して「ダーク」と誤記しているのは、このことばに対する無関心を示す、笑えないミスであ

るといわなければならない<sup>3)</sup>。

以上とりあげた黒古とトリートのほか、『HIROSHIMA』に関する研究としては、川口のもの(二〇一三)があるが、とくに(Ⅲ)の読解に関して重要な論点を提出しており、この点は四の3で取り上げることにした。

### 三 「難死」としての原爆死

#### 1. 「難死」の思想と「被害者⇌加害者」連環

小田の平和思想の根幹にある「難死」の思想と「被害者⇌加害者」連環、およびこの二つの議論の関係については、拙稿(道場 二〇一三)で詳論しているため、ここでは『HIROSHIMA』を読解する上で必要な点に絞ってその内容を確認していくことにする。このことが意味をもつのは、小田自身がこの観点からの「解説」を重ねているからでもあり、とりあえず小田の「解説」も援用しながら本作を読み解く視点を整理していくことにしたい。

その際重要なのは、「難死」の思想と「被害者⇌加害者」連環は相互に補完的ではあるが、それは決して予定調和的な補完ではなく、両者の間に鋭い緊張が存在するという点である。本書の展開も両者の緊張によって支えられているということが出来る。

まず、「難死」という概念は一九六五年一月の論文「難死」の思想(小田 一九六五・九二)において初めて提示・定式化されたものである。「難死」とは、小田が空襲体験の中で出会った無意味としかいいようのないおびただしい死を指す。「ただもう死にたくない死にたくない」と逃げまわっているうちに黒焦げになっ

てしまった、いわば、虫ケラどもの死」を指す(同、六頁)。

小田が体験した空襲とは、彼自身がくりかえし言及している一九四五年八月一日日の大阪大空襲のことである。人々は「虫ケラ」のように殺され、あとには黒焦げの死体がそこに転がっていた。そして、呆然とする人々の上から撒布されたビラには「戦争はもう終わりました」と書かれていた。ならばなぜ死ぬ／殺す必要があったのか、戦争の終わりを知っていて、どうしてこのような死をもたらしただのか、この死の意味をどうとらえたいのか。「いかなる意味においても「散華」ではなく、天災に出会ったとでも考える他はない、いわば「難死」であった」と小田はいうが(同、七―八頁)、彼はその後もこの体験に何度も何度も立ち戻りながら、自らの思想を深めていった。それは小田にとつて過去の不動の「原点」というよりも、何度も何度も回帰してくる「いま」そのものなのだ。武藤一羊は次のように指摘している。

「小田にとつて、「難死」は「…」現在の、そして将来の問題なのだ。空襲体験への小田の執拗な回帰にもかかわらず、それは過去の一点に固定された「原点」ではない。「難死」は大阪空襲から四半世紀をへて、依然として目前にある。「難死」はこの現実として、いま存在する。」(武藤 一九七五、九三頁、傍点原文)

この経験を小田は二〇年後の一九六五年になって、ようやくまとまった論文に書き上げることができた。それが「難死」の思想である。これは小田にとつてばかりでなく、小田のこぼにふれた多くの人にとつても、戦争体験と戦後日本を考える思想的キーワードとしての意味をもった。しかも、小田は終生その意味を掘り下げる努力を続けたのであった。

第二に「被害者」加害者」連環についてであるが、これは一九六六年八月の論文「平和の倫理と論理」(小田 一九六六―九一)において定式化された概念である<sup>(5)</sup>。この概念は「難死」の概念を補充するとともにこれと緊張関係にもあり、両者の緊張関係の中で小田の平和思想は有効性をもちうるというふうによく特徴づけることができる。小田は次のようにいう。

「一九四五年の「敗戦」に終る日本の近代の歴史は、つまるところ、殺し、焼き、奪つたはての、殺され、焼かれ、奪われた歴史だった。その歴史の展開のなかで、日本人はただ被害者であったのではなかった。あきらかに加害者としてもあった。被害者でありながら加害者であった、と言つたのでは、それはむしろなかった。被害者であることによつて、加害者になつていた。」(小田 一九九一、iv頁)

つまり、「被害者」であることと「加害者」であることは逆接の関係ではなく、順接の関係にあるということだ。この概念は、ベトナム戦争下の日本が日米安保条約によつて好むと好まざるにかかわらず「加害者」の立場にあり、人々はそうした「加害者」であることを強いられることにおいて「被害者」でもあるのだ、という形で同時代を読み解く視座を提示した。そのことによつて、戦争体験とベトナム反戦運動を結びつける「いま」の、さらには「将来」の戦争を問う論理と倫理を提供したのである。それは、人が戦争の中で生きることの意味を構造的に――そして関係論的に――把握する視点でもあった。

その示すところは次のような内容をもっている。侵略国・日本の戦争体験は、「被害」と「加害」が切り離せない重層的構造をな

している。そして、この「被害」と「加害」の重層性は個人の上  
に起こる。よって、国家のなした「加害」と受けた「被害」を相  
殺するような政治が本来及ばない、国家間の「被害」の相殺取引  
とは異なるものとしてこの連環を受けとめる必要がある。という  
のも、歴史修正主義者は国家の行為としてのみ戦争をとらえ、「被  
害」「加害」を量化可能・相殺可能な歴史的・政治的取引の材料と  
する。こうした量化・相殺の政治を断ち切るのが「難死」の視点  
なのである。——二つの概念はこのようにして相互に補充しあう。

他方、「難死」概念にも、それだけでは限界がある。小田は「散  
華」（国家のための「崇高な」死）を強いる「公状況」に対して、  
一人一人の死にこだわる形で「私状況」を対置していた（小田  
一九六五―九二）。しかし、それだけでは「私状況」を守るための  
国家、というロジック、たとえば「シーレーン防衛」などのロジ  
ックを出されたときにいとまたやすく回収されてしまうことにな  
る。つまり、「難死」が国家の手によって「崇高」な死へと錬金  
術的に変換されてしまうのだ。その魔術を断ち切るためにも、関  
係性と責任の論理である「被害者⇨加害者」連環の認識を持ち込  
む必要があった。かくしてこの二つの議論系は相互に牽制しあい  
ながら、国家原理を撃つ個人原理を設定し、そして、国家やさま  
ざまな個人の責任を問い返す倫理と論理が構成される。小田の思  
想はそのような形で展開・深化していったのである。

## 2. 「難死」者の国際連帯

では、小田は広島・長崎の被爆体験に関してどのように論じて  
いるのか。この点について、彼は当初、「難死」の思想とつなが

る「敗戦国ナショナリズム」を形成する国民的経験として位置づ  
けていた。少し長いが引用しておく。

「なぜ、日本人に告発する義務があるのか。それは日本人だけが  
国民的規模においてそうした被害者体験をもち、それゆえに、そ  
れと自分の加害者体験とのからみあいの上で、原子爆弾に対決す  
る人類の普遍原理を自分の個人原理になし得る契機をもっている  
からなのだ。ここで、かんじんなことは、過去の被害者体験、加  
害者体験を過去のすぎ去つたもの、完結したものとせず、現在、  
未来にわたる問題としてとらえることだろう。そして、もう一つ、  
かんじんなことは、普遍原理をそうした過去、現在、未来にわた  
る被害者体験、加害者体験のからみあいのなかに突き入れ、その  
重みの下に位置させることよって、それを国家原理に対して個  
人がよって立つ原理——個人原理（それは言いかえれば、国家と自  
分は別ものであるという強烈な自覚だろう）にすることであると、  
私は考える。その被害者体験、加害者体験は国家原理との関係に  
おいて成立したものであるがゆえに、また、より根本的には、そ  
の民族の歴史的、社会的によつてたつ条件のからみあいのなかに  
あるがゆえに、ナショナルなものであり、普遍原理はその重みの  
下にあることよって、ナショナルな色彩をおびる——インター  
ナショナルリズムに通じる開かれたナショナルリズム（が、ナショナ  
リズムの理想であるときよく説かれる。私も同意する）が存在すると  
すれば、それはそうした契機を通じてしか成立し得ないものであ  
ると、私は思う。」（小田 一九六六―九一、八〇―頁）

だが、ここで語られている「個人原理」を明確にしていくにつ  
れて、日本国民の経験に特別な位置を与える議論はなされなくな

つていく。原爆による死はまさに「難死」というほかないものであったが、日本の市民たち、そして反戦平和運動——ここで参照されているのは原水爆禁止運動である——が、自分たちが戦時にとり結んでいたアジアの人々との間の「被害者⇨加害者」連環を見失えば、自己中心的な被害者論的運動に閉塞してしまいうだろうと小田は考えた（そのアンチテーゼが「ペ平連」である）。先に引用したのと同じ「平和の倫理と論理」の中で小田は次のような重要な問題提起をしている。

「私たちの被害者体験は強烈なものであったゆえに、今述べたような欠陥にもかかわらず、私たちはまだ十分に個人原理確立の芽を失っていないのだが、同時に、その体験が強烈であればあるほど、他国民の被害者体験（実は、それは、私たちの加害者体験によってもたらされたものであるのだが）に対して、他人のことなどこの際かまっておられぬ、というエゴイズムになって終った。ここで、私たちの被害者体験は、同じような態度を他国民にとる国家原理のエゴイズムとふしぎに照応し、密着する。そして、そのことによって、被害者体験を軸としてあり得たかも知れない他国民との連帯の可能性は失われる。」（同、八三頁）

「被害者体験を軸としてあり得たかも知れない他国民との連帯の可能性」——「唯一の被爆国」の表象の中で、原水爆禁止運動が見失っていったのは、この連帯の可能性であった。

この点に着想を得た長崎原水爆の活動者で被爆者でもある岩松繁俊は、連帯できないのは日本の被爆者たちが自らの被害を徹底して掘り下げることもなく、ましてや加害性を自らに問うこともなかったからだと厳しい問題提起をしている（岩松 一九八二）。

「難死」者の国際連帯は可能か？——それは『HIROSHIMA』の（Ⅲ）を読み解く上でもひとつの手がかりとなる問いであろう。この問いを突き出していただけでも、すでに「唯一の被爆国」表象に基づく同時代の運動や表現、思想を超えるところにこの作品が立っていたことは、いまさら指摘するまでもないだろうが、「唯一の被爆国」という表象を超えることはこの作品の出発点ではあっても到達点ではない。この作品を評価するのであれば、もっと困難な課題に小田が挑んでいたという、その最もクリティカルな点においてそうすべきであろう。

### 3. 「難死」としての原爆死

では、小田は原爆による死を、小田自身の経験した空襲による「難死」と区別される特別な死と考えているのだろうか。答えは否である。むしろ「難死」の概念をおくことで、小田にあっては両者の異質性よりも共通性において考えられている。小田は次のようにいう。

「ここでひとつつけ加えておきたいことがあります。それは、原爆による爆撃は都市の無差別爆撃の自然な延長線上にあることで、何も特別、特殊な爆撃ではないということです。そうした認識で原爆爆撃を見て行かなければ、このの本質を見あやまります。」（小田 一九九六b、五九六―七頁）

とはいえ、両者はもちろん「同じ」ものではない。先に引用した文章の少し前の箇所、小田はこう述べている。

「私はこの大阪の「地獄」を、規模と性格を根本的に異にする、「ヒロシマ・ナガサキ虐殺」の地獄になぞらえるつもりはありません。」

せん。それでもひとつ共通して言えることがあって、それは、こんなふうに「地獄」のなかで「人間は殺されてはならない」——そのことです。」(同五六九頁)

「こんなふうに」……人間は殺されてはならない」という怒り、それは小田の生をつき動かす原動力でもあった。そして「こんなふうに人間は殺されてはならない」という考えは、小田が阪神・淡路大震災で遭遇した、新たな「難死」者たちに触発されて形を得たものである(道場 二〇一三)。一九九五年の震災経験は、小田に新たな形で「難死」を考える契機となった。小田は再びさまざまな「難死」と向き合い、その思想を深めていったのである。あとでふれる「絶対的加害者／被害者」という概念もそのひとつであった。

大阪の空襲と広島・長崎の原爆投下の関係に話を戻せば、両者を直接に結ぶ歴史的契機がある。それは戦時の日本とアメリカ双方の指導者が意図せずして結んだ共犯関係であった。「国体護持」のために引き延ばされた敗戦と、そのことを見越した核兵器の使用(そしてもちろん「戦略爆撃」の継続)——この一九四五年七月末から八月前半にかけて展開した政治過程は、結果としておただしい「難死」をもたらしたのであった。

「この事実で私が強い怒りをもつのは、ここには期せずして日本とアメリカ、二つの国家の国家権力の結託があるからだ。その結託の中心に天皇があり、天皇の「生命乞い」がまぎれもなくあった。」(小田 二〇〇六、三六頁)

小田はその体験を通して被爆者に「同情」をしている——武藤が指摘するように、小田がしばしば用いる「同情」ということば

は「憐憫」とは異なり、その人間の「身になって考える」ことを意味する(武藤 一九七一―七五、九三頁)。「難死」の視点による「同情」であり、そこから「被害者」加害者」連環を問うていく足場が生まれる。九五年の震災における「難死」に関連して小田が綴っている文章を読むとき、まるで「はだしのゲン」のような光景が語り出されていることに驚いたことがある。そこでは崩れた家屋の下敷きになった家族が生きたまま焼かれる場に立ち会わざるを得なかった被災者のことが語られていた(小田 一九九六a)。小田はこのことを伝聞として語っているが、同じく中沢啓治も母から父・姉・弟がそのようにして焼かれていった光景を伝え聞き、のちにマンガに描いた。このような生と死——「難死」と「難生」——の別れに向けられた小田のまなざしは、中沢の、そして出会うこともなかった被爆者たちの経験につながっている(道場 二〇一四)。

しかしそのことは、「難死」者をつべりとした「被害者」の群れに融解させてしまうことを意味するわけではない。トリートは次のように『HIROSHIMA』を評価するが、「類としての被爆者」というような考え方は小田の「難死」の思想とは対立するものである。

「小田実とは日本の原爆文学において画期的なことを成し遂げた。小田にとつて最も重要な問題は、「アメリカ人」と「日本人」の違いということではなく、被爆者であることと非被爆者であることとの間に生じる流動的な状態についてである。八月六日の朝を物語る『HIROSHIMA』の重要な登場人物の一人にジョー・クランシーを設定したということは、小田が国家間の複雑な歴史的出

来事をある単一国家（アメリカであれ日本であれ）の単なる政治的プロパガンダとして具体化することへの抵抗の姿、と言えよう。個人としての「私」から集団としての「我々」へと、ジョー・克蘭シーが転換することは、類としての被爆者の存在を示すうえで極めて重要なことだったのである。（トリート 一九九七、四四五頁）<sup>6</sup>

「個人としての「私」から集団としての「我々」へ」というのも、小田の『われわれの哲学』（小田 一九八六）の誤読であろう。小田が語るのは、異質性を抱えた人間たちが連なることで、開かれた「共生」の関係としての「われわれ」の関係ができる、という期待である。

「私が日本語の「われわれ」ということばをガンチクのあることばだと思ふのは、これほど個々におたがいが独立しながら、しかも結びついている「共生」のあるべき人間関係をみごとに言いあらわしていることばはないと考えるからだ。「われら」ということばが言いあらわす世界は閉じていて、自分たち以外の「他者」をきびしく峻別している感じだが、この「われわれ」の関係のなかでは「他者」は「他者」でありつづけながら自分と結びついていて、「われわれ」の世界は外にむかつて大きく開かれた世界であるにちがいない。「われわれ」はそれを「われわれ」ととらえるとき、そこで「われわれわれわれ……」というふうにつづいて行く連環のなかで考えて行くことができる。」（同、一六八頁）

しかしながら、「われわれ」の関係は生者の関係であり、死者は分断され、個別的に殺された存在としてとどまっている。こ

のことを前提として、小田は「ひとりずつ個人として殺された」原爆死について次のように語る。

「しかし、どんなに巨大で複雑な「殺人機構」のなかでも、最終的にボタンを押した人間はいるものです。「殺人機構」の巨大さ、複雑さに、そこでの責任の無限拡散の可能性にケムリにまかれずに、まず、その「下手人」の責任を問題にすべきです。そして、問題をいったん「殺す人」「殺される人」の一对一の関係に引き戻して、そこから事態全体をとらえて行く——それが今必要でないかと私は思います。もちろん、ボタンを押した「下手人」は「被害者」「加害者」のメカニズムのなかにいたことでしょう。それならそれで、彼に命令を下した上司は誰か……とひとりずつそして、ひとりずつ、個人の責任を問題にして行く。こうした作業は過去に対してではなく、現在、未来にかかわって必要だということはすでに私は十分に述べて来たつもりです。「殺された」側は、「大量虐殺」のなかであろうと、いつでも、どこでもひとりずつ個人として殺されたのですから。」（小田 一九九六b、六〇四—五頁）

「難死」は安易な「類」化を許さない。それぞれの死の場所に「虫ケラ」のように横たわるだけの「難死」者の固有性は、小田の思考の出発点でもある。いま見た引用は、「絶対的加害者」の存在を指し示すとともに、『HIKOSHIMA』(Ⅲ)の「謎解き」のような趣の文章であるが、そのことは少しあとでもう一度問うことにしたい。

「難死」としての原爆死、そこに重層した「被害者」「加害者」連環が小田においてどのようにとらえられているかについては、以上であらましをおさえることができたと思う。

#### 四 連鎖を断ち切る

##### ——『HIROSHIMA』において目ざされたもの

#### 1. 「難死」者の重層化

では、『HIROSHIMA』において小田が目ざしたことはなんだったのか。一九九〇年のあるシンポジウムでの発言として、小田が次のように発言していることが注目される。

『HIROSHIMA』の中にも書いたんですけど、広島では原爆で二〇人弱のアメリカの兵隊が死んでますね。捕虜ですね。それはそれとして、被爆したアメリカの兵隊たちは、カンカンになって怒った日本人に見つけられて、おたがい争っているうちにとともに死ぬ。私はこういう話を敗戦のあとすぐ聞いたのですが、十分あり得たことだと思う。おたがいにまったく悲惨な話です。日本人から見れば、アメリカは加害者です。しかし、彼ら自身も何も好きこのんで日本にきたわけじゃない。兵隊に駆り出されてきた、ぐるぐるまわっているのです。そのぐるぐるまわるメカニズムを切断する。それが大本です。そのことを書くのが、文学の役割だと思っんですよ。」(西田・鎌田・小田ほか 一九九〇、五〇頁)

「ぐるぐるまわるメカニズム」とは、「被害者⇨加害者」連鎖のことであるが、この連鎖はどこで切ってもその切断面には被害と加害が重層した主体の断面があらわれるだろう。しかしそれは、「誰もが被害者であり加害者でもある」という平板で相手のいない認識の形でとらえてはならない。被害と加害は主体を構成する素材の成分比ではないし、「被害者」であり加害者でもある」とい

うように平板化された主体を並べていっても、「お互いさま」、つまり具体的な加害／被害の経験が捨象された相対主義の世界、経験の脱色された灰色の世界しかあらわれない。被害にも加害にも、必ず相手がある。その相手との抜きさしならぬ関係において、人は誰かを傷つけ、また傷つけられる。加害／被害の経験は相対化・相殺されることのできない固有の傷なのである。

とすれば、その連鎖を断ち切るとは一体どういうことなのか。端的にいえば、それは加害／被害の関係性を解体すること、である。そしてこの困難に挑むことこそ、「文学の役割」だという小田のことは、『HIROSHIMA』、とくにその〈Ⅲ〉を読み解いていく上で最も重要な手がかりとなる。『HIROSHIMA』の〈Ⅲ〉はまさにこのこと、つまり「ぐるぐるまわるメカニズム」を断ち切るための文学的試みとして位置づけることができるだろう。

先に三―二で見たように、小田の「難死」の思想の中には、「難死」者の国際連帯という考えが含まれており、何よりもそれは原爆による「難死」者のことが念頭に置かれた問題提起であった。だが、小田自身も自覚していることであろうが、それは容易なことではない。というのも、岩松が述べていたごとく、「難死」者とはいっても等価な存在ではなく、「難死」者の中にすら「被害者⇨加害者」連鎖は貫徹しているからである。被害者が加害者でもあり、被害も加害も徹底して突き詰められておらず、そして何より被害と加害が相殺できないものであるとすれば、この不等価な存在は、いかにしてつながることができるのか。この難問に直面して、小田は「ぐるぐるまわるメカニズム」と、それを生み出した者——これはのちに「絶対的加害者」と名づけられる——へ

の怒りを新たにする。そしてこのもつれあう関係そのものを描き出しながら、それを断ち切るための仕掛けを設定した。採られた戦略は、主体を重層させるといふ戦略だった。

(Ⅲ)ではどこか判然としないアメリカのウラン鉱山での労働を語る先住民(ホピ族とは異なる民族の)老人・ベシユラカイ、アフリカ出身の医師・ウインスロー、ウラン鉱山の廃水で被ばくし目の見えないホピ族の少年ラルフ、それにベトナム帰還兵でありアトミック・ソルジャーでもある元米兵のグレンが、それぞれに語り合う中に、この物語ですでに登場してきたさまざまな人物が「憑依」し「堆積」し、相手に別な存在を重ね合わせるという複線的な重ね写しの作用が重層する形でストーリーが進行する。ここでは、アメリカ先住民から日本人、中国人、朝鮮人、ベトナム人をひとからげに名ざす「グーク」という差別語が効果的に用いられている——「ジャップでもチャイナマンでもコーリア野郎でも同じことだ。グークであることに変わりはないな。みんなグークのアカだ。おまえ、海兵隊がコーリア野郎との戦争でカクカクたる大戦果をあげたことを聞いたことがあるだろう。コーリア野郎のアカのグークをやっつけたんだ。そのまえは……」。「……ジャップ相手だ」というように(三八〇—頁)。

ここで表現されているものは、植民地の連鎖、黒古やトリートが第一に重視する核物質の連鎖とともに、被害者と加害者の重ね写し(一)に登場したホピ族の老人チャックとベシユラカイの重ね写し(一)や、被害者と被害者の重ね写し(一)に登場したホピ族の少年ロンとラルフ——さらにはこの人物はしだいに「ロン」そのものとして語りはじめる)、さらには広島で原爆死した日系少年やアメリカ

人青年などが縦横に憑依する情景である<sup>7)</sup>。この四つの肉体とこれに重層するさまざまな主体がヘリコプターに乗り込み、昭和天皇と合州国大統領を撃つ、というクライマックスへとストーリーは展開していく。

## 2. 二つの絶対性

この重層した主体をどのように理解すべきか。この問いに答えるためには、小田の思想の中でせめぎ合っている二つの絶対性というものを考える必要がある。二つの絶対性とは、ひとつは「難死」の絶対性であり、もうひとつは「絶対的加害者／被害者」という概念に示された絶対性である。

先にも少しふれたように、小田は阪神・淡路大震災に遭遇して、「難死」の思想を問い直し深める契機を得た。また、そのようにして力場が動くことで、「被害者⇄加害者」連環の認識も連動して動くことになった。そこで新しいキーワードとして浮上してきたのが「絶対的加害者／被害者」という概念である。この概念は、ほかならぬ『HIROSHIMA』への「解説」をする中から生まれてきたものである——あるいは、新たなキーワードを生み出す作業の必要から自作に言及したのかもしれない。

少し長くなるが、『HIROSHIMA』において「絶対的加害者／被害者」を描こうとした動機についての、小田の「解説」を見ておくことにしたい。

「さっき私が言及した私の小説『HIROSHIMA』はもちろん幻想のなかでの話ですが、天皇がアメリカ合州国にやって来て大統領をワシントンのホワイト・ハウスに訪れたとき、時空をこえて集



まったくさまざまな「絶対的被害者」たちが核実験地の「グラウン・ド・ゼロ」の汚染された土をヘリコプターから、ちょうど庭に出て来た二人の上から撒き散らすという場面で終わります。そのとき、その「絶対的被害者」のひとり、が「殺したやつが殺されて、世界の順番が下から変わる」と叫びます。ふつうの順番だと、上から誰かが誰かを殺し、その誰かがまた誰かを殺す、というぐあいに世界の順番は成立していて、おしまい「絶対的被害者」のどんづまりにまで達するのですが、下から逆に上方にむかって「殺されたやつ」が殺して行けば、世界の順番は下から変わって、ついに「絶対的加害者」としての天皇、大統領に達します。

もちろん、これは荒唐無稽な幻想の場面ですが、私がここで述べておきたいのは、これまでに述べて来たことを絵解きするつもりで私がこの場面を考え出したのではなかったことです。実を言うと、はじめこの作品を書き出したときには、私は小説がこうしたかたちで終るようには意図していませんでした。さまざまな登場人物たちがそれぞれにちがったかたちで「絶対的被害者」への道を歩み、ついには「共死」「共殺」されるという道程を書いて行くなかで、この場面——「絶対的加害者」との「対決」の場面が小説の自然な、そして、それしかあり得ない帰結として私の意識のなかに定着して行ったと言つていいかと思います。あえて言えば、「共死」「共殺」された人びとの「エポス」がこの結末の場面を書かせたとと言えるような気さえ私にはします。(小田 一九九六、六一—三四頁)

非常に明確に「解説」されているため、これ以上の解釈はあり得ないかのようだ。だがこの「絶対的加害者／被害者」という概

念に関して注意しておくべきことがある。小田は「絶対的被害者」を立てておいて、そこから全ての「加害者」を撃つ、というような新左翼的な倫理主義は好まなかった。むしろ「加害」と「被害」が重層している多くの人びとに、その現実を問い、責任者の責任を追及し、それぞれがそのメカニズムから離脱する可能性を探求することを求めた(生者たちにとつての出口としては「市民的不服従」「個人原理」がある)。

「私が「被害者」加害者」のメカニズムのことを言い出したのは、「加害者」も「被害者」だからゆるしてやってくれ、ではなくて、まったく逆に、「被害者」も「加害者」としてあった、「加害」の責任を免がれないことを主張したかったからです。(同、七一頁)

そこで重要な意味をもつのが、「難死」の絶対性という視点である。小田は「被害者」加害者」連環の中にいる人間、つまり何らかの「加害」に関わっている人間といえど、「難死」を遂げた際に、それが「因果応報」(「ザマアミロ」)だという考え方はしない。「人はあのように殺されてはならない」からこそ、「難死」は相対化されない。相殺もされない。「虫ケラのような死」を死ぬことは、それが「加害者」であっても「あつてはならない死」なのだ。「難死者」は自らを「難死」に至らしめた加害者を告発する権利を持つ。新左翼的な倫理主義であれば、たとえ「難死者」であったとしても、それが「加害者」であるならばその死は「やむを得ないこと」あるいは「当然の報い」となるだろう。小田はこの作品の中で、その倫理主義の磁場、そして「被害者」の立場に寄り添うことで生じる怒りに深く共振しながらも、そうした単線的な展開をしない。

一方で小田は、「被害者⇨加害者」連環について、次のような自己解説を試みている。

「被害者⇨加害者」の連環を通して戦争の問題を考えるやり方は、元来、私たちふつうの人間の戦争責任を問題にするなかでかたちづくられた認識の方法だった。あれはただ指導者がやったことだというありきたりの逃げを許さない——この返還を最初に問題にした私にはまずその基本認識があった。自分自身に対しても、私はその基本認識で対して来た。

ただ、この認識には、誰も彼もが「被害者⇨加害者」になることで、かえって「加害者」としての責任が曖昧にされてしまう弱点をもっていた。あるいはまた、後者の「加害者」より前者の「被害者」の面が強調されて、責任は薄れぼやける。本来、この「被害者⇨加害者」認識は「被害者」の名によって「加害者」の責任を免責するものではなかった。それどころか逆に「被害者」の「加害者」責任を徹底して追及するためのものではなかった。しかし、どうしても「免罪」の匂いはつきまとった。たしかに誰も彼もが「加害者」だが、そうあり得てふしぎはないが、しかし、とにかくみんな「被害者」だ（ゆるせ）となり得た。カッコのなかはみんな小声で言うのだが、しかし、「被害者」でない「加害者」——「絶対的加害者」はいないのか。いなかっただのか。（小田 一九九六 a、三〇五—六頁）

自らが加害者であり、そのことによって被害者でもある、という認識は、他者との関係の発見と、それによる主体の自覚を促すはずのものであった。それが、誰もが加害者であるかもしれないけれど、同時に被害者だったんだという免責の装置となってしまう

うとき、そこにはもはや他者は存在しない。自らが加害をなした他者と向き合うことなしには「加害」も「被害」も抽象的なものでしかなくなる。相対性に揺らぐ「被害者⇨加害者」連環に対し、小田がここで呼び込むのが「難死」の絶対性なのであった。「難死」「難生」を強いられた側の視点で全体を見すえないかぎり、「連環」理論にはどうしても「免罪」の匂い、臭気がつきまとう」（小田 一九九六 a、三〇七頁）

そもそも「難死」者はそれぞれに相対化されぬ個別的な死を、そして「あのように殺されてはならない」死を死んでいたのであった——たとえ「加害者」であったとしても。『HIROSHIMA』では、小田がのちに整理したように、「絶対的加害者／被害者」という構図が一方でストーリーを支えているのだが、他方でそれに抗う力も内包されている。核をめぐるさまざまな「難死」者（あるいは「難死」を遂げようとしている者たち）が、連帯をすることもできず、しかしひとつひとつの加害／被害の連鎖のはしごを登ることもできないところで「憑依」という飛躍が起こる。それは二つの絶対性、つまり「難死」の絶対性と「絶対的加害者」へのぼっていく「はしご」のイメージとがせめぎ合っていることのあるわけではない。

小田はこの加害と被害がつらなる状況を「はしご」の喩えで表現している。たとえば一九八八年に行なわれた講演の中で彼は次のように述べている。

「朝鮮人にとって日本人は、被害者の日本人でさえ加害者だった。大量虐殺のなかで被害者も加害者もいっしょに死んだ。朝鮮人にとって日本人は植民者であり、日本人はつねにかれら被植民者の

上にいた。こうして支配と差別の「はしご」がかたちづくられ、そこではつねに強い者が弱いものの上にいた。このヒエラルヒーつまり「はしご」は突然、大量虐殺ホロコイェストのなかでつぶれた。」(小田一九九五b、三二二頁)

「はしご」が「つぶれてしまった」とはどういうことか？ それはつまり、加害者も被害者も折り重なって同じ死に方で死んだ、ということである。ふだんはいっしょに死ぬことのない人びとが「全員いっしょに死んでしまう」、それが「難死」なのだ。小田は述べている(小田一九九五a、一九頁)。ここに「被害者」加害者「連環」と「難死」とが同時的にならわられている。そこにつぶれたままになっている「難死」を、一つひとつ、一人ひとりたどり直すとともに、「難死」と「被害者」加害者「連環」とを緊張関係に追い込むこと。それが『HIROSHIMA』において企まれた仕掛けである。この作品においては、「被害者」加害者「連環を」「難死」者たち——より正確には「亡者」と化し、憑依した「難死」者たち——がたどり直す作業をする。

この点について小田は、同じ「はしご」の比喩を用いながら、九六年以降は若干異なる説明を与えている。

「上」にはあまた命令をくだす「上」があり、「下」にはあまた「上」からの命令を遂行する「下」があって、この殺人、殺戮のハシゴは完成する。この「殺し」のハシゴの究極の「下」にあつたのが、広島、長崎の犠牲者たちだった。彼らの下にはもう「下」がない。彼らほとんどづまりの「下」において、そこで全体のハシゴの重みの落下を受けて潰え去った。「……究極の「上」の責任を問うことなしに、あまたの「下」の責任を問うことはできない」(小

田一九九七、四二二—三頁)

ここでは「はしご」がつぶれること、つまりそれぞれの「難死」の絶対性よりも、「はしご」が「上」と「下」の連なりであるという「被害者」加害者「連環」の方が前景化している。「絶対的加害者」の概念は、こうした力点の移動によってせり上がってきたものだ。

加害と被害の連鎖を「下から逆に上方に向かって」たどっていけば「絶対的加害者」に行きつく、このことはすでに作中でも口の憑依したラルフがそのような発言をくりかえす形で表明されていた。しかし、『HIROSHIMA』という作品では、「難死」の絶対性と「被害者」加害者「連環」の間に緊張が存在している。というのも、「絶対的加害者」を撃つために加害／被害のさまざまな関わりにある「難死」者たちが連帯する、ということがすんなりと成立するのであれば、「絶対的加害者」以外の立場は相対化されてしまいかねない。それぞれの「難死」にこだわることは、「絶対的加害者」よりも「下」のそれぞれの加害者たちを個別具体的に追及することを手放さないのだ。しかしその具体性を手放さないのであれば、誰が「絶対的加害者」を撃つことができるのか。

加害／被害の長い長い連鎖を可視化しながらもストーリーは「下」から順番に自分より「上」の加害者を撃つ、というふうには進まず、むしろその点は、憑依するキャラクターたちがその都度語り出す加害／被害の関係の中にはあらわれても、その多重的なキャラクターを引き受ける主体は、それらが同時に重層する形で描かれていた。この重層性こそ、この作品が試みようとしたことの表現の形なのである。それは、一人の人間の中に加害と被害が

重層しているということとは異なる問題であるということには注意が必要だ。『HIROSHIMA』の〈Ⅲ〉においては、加害者と被害者が同じ身体に憑依する。「亡者」には名前がないのだよ。男と女の区別もない。老人と子供の区別もつかない。人間かどうかの区別も……」（三五三頁）というように<sup>⑧</sup>、誰かであり、そして誰でもある「亡者」にとつて、一つひとつ追及される加害／被害の事実に関しては、「被害者」の側に堆積する形で「加害者」を撃つ、という動きをしていた。「亡者」はときにアメリカ合州国海兵隊の戦闘服を着て整列までするのだ（三九〇頁）。

ここではアメリカ先住民も一律に「絶対的被害者」にはされていない。ホピ族の人びとは物質文明への対極として「絶対的被害者」の位置があてられている（何重もの差別と被爆）が、他の民族に属するベシユラカイの位置は「被害者Ⅱ加害者」連環の中に置かれている。その上、おそらく誰も傷つけず「絶対的被害者」といつてよい立場にあった二人、〈Ⅰ〉に登場する老人チャックはベシユラカイに憑依し、少年ロンはラルフに憑依——いや同一化——し、物語の最後に二人とも死んでしまうとしても、その主体の位置はそれを孕まされている。本作では誰が誰を殺したかはたどり直されるが、同時に「被害者Ⅱ加害者」と「絶対的被害者」として指し示された主体とが重ね写しにもなっている。さまざまに位置にいる「難死」者が、「難死」者であるという共通性——「類」的性質——によって固く団結をするというのではなく、加害者と被害者の関係を「亡者」が憑依するという形で同時に引き受け堆積しながら、不定型な群れとして「絶対的加害者」に迫る、というところからこの作品の思想的格闘と工夫がある。あるいは、

小田なりの文学的「飛躍」、思想的「揺れ」に向き合うひとつの形がある。

だが、たとえば林京子が小田の自己「解説」に深く説得されてしまっているように思われる。彼女は『HIROSHIMA』が世界各国で読まれ、受け入れられているのは、「共犯」関係のなかで構築されていった視野の広さと、「絶対的被害者」によって「絶対的加害者」がたぐり出されることにある」というとき（林一九九七、四三七頁）、そのような文学的バクロでは済まない難問をこの作品が抱えていることから逆に目を逸らすことになってしまっているように思われる。

「はしご」の比喩の力点の変化にも見られたことだが、この作品が書き上げられた当時は加害と被害の連鎖を断ち切るために「絶対的加害者」のもとへ向かった登場人物たちがやはり「難死」してしまふという、この「難死」の圧倒性と、作中でも語られている「絶対的加害者」の指し示しが拮抗する形で理解されていたように思われる。しかしその後、小田自身は「絶対的加害者」の問題を軸にこの作品を語るようになる。

したがって、九〇年代においてこの作品が「絶対的加害者」の告発を軸として読まれるようになったことは、作品としての可能性をつかみ出す上で「深化」といえるのかどうかについては留保が必要ではないだろうか。というのも、「絶対的加害者」を指し示すことは「文学」でなくてもできるからだ。また、「被害者Ⅱ加害者」連環も、社会科学的に客観化可能である。おそらく「文学」でなければ表現できないこと、それは「難死」者の側からことごらの全体性を表象すること、そして沈黙の淵に沈められた「難

死」者にことばと肉体を——つまりアクションを——与えること、であるだろう。

### 3. 結末をめぐる

本作において小田は、加害／被害の絶対性と「難死」の絶対性のはさまにあって、いかなる形でこの二つの絶対性を損なうことなく、「HIROSHIMA」の名に象徴される「すべて」を表現するか、という難問に直面してはたはずである。ここで採用されたのは、「難死」の絶対性を軸として——「加害」と「被害」の位置を異にする——諸主体を重層させ、「絶対的加害者」たる昭和天皇——「H」という頭文字で始まる「ジャップの政府のボス」——と合州国大統領を撃つ、という構図であった。しかしすでに見たように、二人を撃つ登場人物たちもまた、多様な「加害」にまみれている。ただ一人の少年だけは「絶対的被害者」の位置にいる人物ではあるが、彼の身体にも「難死」を遂げた「加害者」でもある少年たちが憑依していた。

物語の結末は、「グラウンド・ゼロ」の土を積み込んだヘリコプターが墜落し、天皇・大統領もろとも——文字どおり——「難死」を遂げる、という形をとり、さらにそれは幻想で、入院していた彼らは「みんな死んだ」(四一七頁)という終わりを迎える。つまり、物語の中ではまず登場人物たちが生き残って天皇・大統領が死ぬ、というシナリオが閉じられ、次いで登場人物も死ぬが天皇・大統領も死ぬ、というシナリオに転じ、最後は登場人物たちだけが死んで他は生き残る(もちろん天皇・大統領も)、というシナリオとして終っていく。多様な被ばくと核被害によって身体

を侵された彼らのみが「みんな死んだ」という終わりなのである。いや、正確には、ヘリコプターに乗る形で幻想の中に登場してはいたが、黒人医師ウインスローは現実の世界に生き残り、他の者の死を看取る。彼が全てを見届ける役として生き残るのだ。「難死」者ではない者として。

ここに至る(Ⅲ)では、因果論的な語り方、ストーリー展開の仕方がなされていく中で、重層した主体が順番に「殺サレタ者ガ殺シタヤツヲ殺ス」(三九九頁)ことが示唆されるが、最後はさまざまに「被害者」加害者」が「絶対的被害者」と重なりながら「絶対的加害者」を撃つ、という構図が示されることになる。「難死」への怒りと「被害者」加害者」連環の間の緊張。「HIROSHIMA」はこれを文学的に表現した作品であるといえるだろう。「殺ス」といっても殺せず、むしろ多様な死者の「われ」を引きずって、「われ」われ」の連鎖によって「絶対的加害者」を撃つ、という構成をここでは「出口」として採用したのである——天皇と大統領は突然の判決のようにターゲットとして名指される。まるで既定事項のように。

幻想の中で描かれたヘリの墜落は、「失敗」を意味しているのだろうか？ この墜落は、物語が「勸善懲悪」や「復讐」に陥ることの拒否であるといえる。そしてこの作品のテーマが「絶対的加害者」を撃つことにあるとするなら、ヘリが墜落してもしくなくとも、大して違いはなかったともいえるだろう。そもそも放射能を防ぐために「宇宙服」で防護された登場人物たちは、いずれも深刻な末期ガンに苛まれていた。彼らは「こと」を成し遂げたとしても、長く生きられるわけではないのだから。

だが、仮に第一と第二のシナリオが実現したとすれば、天皇と大統領もまた「難死」を遂げることになり、そこでは逆に責任の連鎖、加害／被害の連鎖を問う宛先が「難死」の絶対性によってあいまいになってしまうのではないだろうか——天皇や大統領が「亡者」になったとして、誰に憑依するかはわからないが、彼らを「難死」させるやり方では、責任があいまいになってしまう。その責任は、政治的に果たされるほかないものであり、「文学」が代わりに刑を執行することはできないのだ。しかし「難死」者は何度でも「亡者」と化し、憑依するだろう。それがここで示されたことだ。

『HIROSHIMA』は文学、より正確には小説によってしか表現できないこと、つまり「ルポルタージュ」や論告求刑とは異なる想像力と方法によって、現実の問題であり思想の問題でもあることがらを描こうとした実験作である。それは「加害／被害」の間にある重層的な緊張と、さらにそのことと「難死」の絶対性との間にある緊張を描き出すとする困難な試みであるとともに、著者自身がその問いの中に宙づりとなり、作品完成後もなお宙づりであり続ける場所を示した、という点で小田実にとつても重要な意味をもつ作品となった。

この「宙づり」ということについて、川口隆行は次のように述べている。

「過去の自分や現在の他人が入れかわり立ちかわり憑依し、夢と現実を往還する。[...]こうした未決定性の修辭は、透徹した明晰な認識主体の崩壊を意味するばかりか、それ自体が途方もない流動性、他者化され続ける運動性を生みだそうとする。被害者と加

害者の線引きは無効になるのではなく、常に流動するものとして問い直され、読者はこうした記述に巻き込まれるようにして、殺し／殺される、いずれの側にも安易に身をゆだねることを拒まれる。」(川口 二〇一三、一二五―六頁)

「いずれの側にも安易に身をゆだねることを拒否する」という受けとめ方は、いずれかの主体に同一化することで解答を得ようとする「読者」のあり方に沿ったものである。「拒まれる」ことで否応なく一歩ふみ出したところで遭遇するのは、この暴力に満ちた世界の中で人間が存在する緊張の場である。「宙づり」であるということとは、「亡者」と同じ存在になるということだ。「難死」の視点から「被害者／加害者」連鎖に斬り込み、「免責」による相対化の方向とは逆にその全体構造をとらえようとすると、「絶対的加害者」を呪いの宛先としながら、他の「難死」者たちの呪いを重ね合わせ憑依される場を持続すること、それがこの小説の真の主人公たる「亡者」たちの存在様式である。

小田実の『HIROSHIMA』は、当然のことながら著者の政治的アジテーションとして書かれたものではない。小田自身の思想の中にある葛藤を、その葛藤のエネルギーのまま書ききろうとしたとき、形象化された一つの実験作である。小田がその後もこの作品について語りつづけたのは、作品自体が作者を触発し喚起する問題性を持っていたからである。その軌跡をたどることで、小田とともにわれわれもまた重い思想的課題に何度でも直面するだろう。

1 この小田実論はこれまでに書かれたものの中では最も示唆に富んだものであるように思われる。武藤によれば、この小田論は「本人も気に入つたらしい」ものであった（本件問い合わせに対する武藤氏の応答による）。

2 翌年に出版された講談社文芸文庫版『HIROSHIMA』に掲載された林京子の「解説」「絶対的被害者」と「絶対的加害者」（林一九九七）では、この概念が柱となつて「解説」が試みられている。

3 小田自身は文学作品と作家の思想の關係について「小説は、何らかの主張を傳達することを目的としたものではありません。『…』小説の機能は主張を傳達することではなくて、読む人の心にイメージを喚起することにあるのでしょ」と述べているが（小田一九七五―二〇〇一、五四〇―一頁）、本作は小田の作品の中でも特別に作品執筆後に著者本人によつて何度も評論作品——「解説」——をサブテキストとして補充され、そのことによつてまさに小田の「思想」そのものを表現したかのように見える作品となつていった。

4 誤記を指摘したついでに、もう二点ばかりトリートの誤解を正しておきたい。まず、小田実が六〇年安保闘争に参加したと誤解されていること（トリート二〇一〇、五〇九頁）について。小田は六〇年には病気で寝ていて、安保闘争には参加していない。そしてそのことが「ベ平連」を始めるにあつて新鮮な要素となつたと鶴見俊輔は述べている（鶴見二〇〇八）。第二に、昭和天皇が「日本の首相」と誤記されていること（トリート二〇一〇、五二七頁）について。小田の原文には「そいつは何んという名前かね。ジャップの政府のボスは……」／「知らんな。」／黒い大男はかぶりを

ふつた。／「おれの知つているのはヒロヒトというHの頭文字で始まる男の名前だけだ。（以下略）」とあり（三五七頁）、ここは「ヒロヒト」と解するのが妥当であろう。念のため——つまらない検証であるが——この作品が書かれるまでの戦後日本の首相で頭文字に「H」のつく人物の名を挙げておけば、東久邇稔彦（首相在任期間、一九四五年八月一七日―一〇月九日）と鳩山一郎（同、一九五四年二月一〇日―五六年二月三日）の二名のみである。次に「H」から始まる名前の首相は、一九九三年八月に就任した細川護熙であつて、この作品の時間の中に「H」を想起させる首相は存在しない。

5 「被害者」加害者「連環」という呼び方は一九九六年の『でもくらていあ』（小田一九九六b）以降のことである。

6 トリートは別な著作においても同様のことを述べている。「小田にとつての境界線は、被害者であることと非被害者であることとの間の曖昧な状態にあり、「アメリカ人」「日本人」あるいは現実的な民族的アイデンティティーの間にあるのではない。小田にとつて、ヒロシマを表象する登場人物として日本人でない人物を選択することは、「日本の」出来事であるよりも、「歴史的な」出来事であることを強調することになる——ある個人ではなく、ある国が唯一の被害者であると主張するのに抵抗する（トリート二〇一〇、五二四頁）。ここで流動化しているのが「被害者であることと非被害者であること」なのか「被爆者であることと非被爆者であること」なのか、異なる表現のどちらにより真意があるのかはよくわからないが、「類」として境界線を消失することが小田の真意でないことは本文に見たように確かであろう。

7 ただし、（一）で登場した朝鮮女性・乙順のような存在は、男性ば

かりが登場する（Ⅲ）でも憑依することなく、宛先を失ったままである。

8 同様に、ロンの憑依したラルフとベシユラカイ、アン（ラルフの姉）との会話でもそのことが反復される（三六五―七頁）。

9 彼の父オコタカはコンゴのウラン鉱山の鉱夫だったことが作中で示されている（三三三頁）。

## 参考文献

- 小田実「『難死』の思想」『『難死』の思想』岩波同時代ライブラリー、一九九一年二月（初出、『展望』一九六五年一月）
- 小田実「平和の倫理と論理」『『難死』の思想』岩波同時代ライブラリー、一九九一年二月（初出、『展望』一九六六年八月）
- 小田実『世直しの倫理と論理（上）』岩波新書、一九七二年一月
- 小田実「ある手紙」『小田実評論撰2 70年代——世直しの倫理と論理など』二〇〇一年三月（初出、『冷え物』河出書房新社、一九七五年八月）
- 小田実『「民」の論理、「軍」の論理』岩波新書、一九七八年八月
- 小田実『長崎にて…未来にかかわる』筑摩書房、一九八三年九月
- 小田実『われわれの哲学』岩波新書、一九八六年六月
- 小田実「私のベトナム」としての「小説世界」『小田実評論撰4 90年代——これは「人間の国」かなど』筑摩書房、二〇〇二年七月（初出、『ベトナムから遠く離れて』第3巻月報、一九九一年九月）
- 小田実『『難死』の思想』岩波同時代ライブラリー、一九九一年二月
- 小田実『『ベ平連』・回顧録でない回顧』第三書館、一九九五年一月（一九九五a）

小田実『『殺すな』と「共生」…大震災とともに考える』岩波ジュニア新書、一九九五年四月（一九九五b）

小田実「現代世界と作家…日本人作家の場合」アーネステイン・シュラント、J・トーマス・ライマー編／大社淑子・酒井晨史・金井和子訳『文学にみる二つの戦後…日本とドイツ』朝日新聞社、一九九五年八月（一九九五c）

小田実『被災の思想 難死の思想』朝日新聞社、一九九六年四月（一九九六a）

小田実『でもくらていあ…「人間は殺されてはならない」・「人間の国」「人間の文明」の構築へ』筑摩書房、一九九六年九月（一九九六b）

小田実『HIROSHIMA』講談社文芸文庫、一九九七年七月（一九九七a）

小田実「すべて」をふり返つてのあとがき『HIROSHIMA』講談社文芸文庫、一九九七年七月（一九九七b）

小田実『海冥…太平洋戦争にかかわる十六の短篇』講談社文芸文庫、二〇〇〇年二月

小田実「私の「玉砕」へのかかわり、思い」小田実、ティナ・ペプラー、ドナルド・キーン『玉砕／Gyokusai』岩波書店、二〇〇六年九月

川口隆行『原爆文学という問題領域』創言社、二〇〇八年四月

『社会学』第三七号、二〇一三年二月

黒古一夫「作家案内——小田実」小田実『HIROSHIMA』講談社文芸文庫、一九九七年七月

黒古一夫『小田実…「タダの人」の思想と文学』勉誠出版、二〇〇二年一月



ジョン・ダワー『容赦なき戦争…太平洋戦争における人種差別』猿谷

要監修・斎藤元一訳、平凡社ライブラリー、二〇〇一年二月

鶴見俊輔『期待と回想…語り下ろし伝』朝日文庫、二〇〇八年一月

ジョン・W・トリート『海外寄稿 核批評としての『HIROSHIMA』』

(ジョン・W・トリート、川上千代子共訳)小田実『HIROSHIMA』

講談社文芸文庫、一九九七年七月

ジョン・W・トリート／水島裕雅・成定薫・野坂昭雄訳『グラウンド・

ゼロを書く…日本文学と原爆』法政大学出版社、二〇一〇年七月

西田勝、鎌田定夫、下平作江、徐正雨、平野伸人、江口宣、高史明、

小田実、キム・レイホ、ツェレンドルジ・バルドルジ、本島等、秋

月辰一郎、伊藤真理子『アジアから見たナガサキ…被害と加害』岩

波ブックレット、一九九〇年六月

林京子「解説 「絶対的被害者」と「絶対的加害者」：『HIROSHIMA』

を読む」小田実『HIROSHIMA』講談社文芸文庫、一九九七年七月

道場親信「『難』の思想と現代」藤原書店編集部編『われらの小田実』

藤原書店、二〇一三年七月

道場親信「『はだしのゲン』が見たヒロシマ」上映会・対話会印象記」『原

爆文学研究会報』第四四号、二〇一四年六月

武藤一羊「革命的不機嫌者」根拠地と文化・第三世界との合流をめざ

して』田畑書店、一九七五年一〇月(初出、『小田実全仕事』第十卷、

河出書房新社、一九七一年七月)

C・ダグラス・ラミス『内なる外国…『菊と刀』再考』加地永都子訳、

時事通信社、一九八一年三月

## 付記

研究会当日には、予定を超える長時間報告となつてしまい、研

究会の皆さんには大変ご迷惑をおかけしてしまつた。その場での

討論にも示唆されるものが多かつたが、今回はそのやりとりの内

容を十分に生かすことができなかつた。また、論文化の作業をし

ているうちに、かなり当日語つていないことも書き込んでしまつ

た。研究会の再現という点でも研究会をふまえた論文化という点

でも不十分な書きものになつてしまつたことをおわびしたい。